

「連言錯誤」

代表性ヒューリスティックの例として有名なものに、カーネマンとトヴェルスキーが考案したリンダ問題がある。

【問い】リンダは31歳、独身で、非常に聡明で、はっきりものをいう。大学では哲学を専攻し、学生時代は人種差別や社会正義の問題に関心を持ち、反核デモに参加していた。リンダの今を推測する場合、可能性が高いのはどちらか。

- ア．銀行員である。
- イ．銀行員で、女性解放運動もしている。

イはアの部分集合なので、アよりイの方が確率が高くなることはないが、多くの人はイと回答する。このような現象を連言錯誤と呼ぶ。

他には、たとえば、

【問い】男は誤って老人を車でひき殺してしまった。彼は警察が到着したときに、どのような行動をとったか？

- ア．犯罪現場を去った。
- イ．殺人犯と疑われるのが怖くて犯罪現場を去った。

この場合、アはイの上位集合にあたり、イはアの部分集合である。

つまり、イはアに「含まれる」ため、アが正しい。

人は具体的な連想に弱いものだ。

つい「自分」が連想したものを正解と思い込んでしまうのだ。

人は主観や感情に引っ張られやすいからである。

上位集合と部分集合

